

香川大学 大学教育基盤センターニュース

No.6 平成30年11月

*Higher Education Center
Kagawa University*

香川大学 大学教育基盤センター
〒760-8521 高松市幸町1-1
Tel 087-832-1151~1154
Fax 087-832-1155
<http://www.kagawa-u.ac.jp/high-edu/>

目 次

1. 創造教育推進部門の新設について…………… 1
2. 第66回中国・四国地区大学教育研究会報告…………… 3
3. SPODフォーラム2018報告…………… 8
4. よりよい授業のためのFDワークショップ報告…………… 9
5. FDスキルアップ講座報告…………… 10
6. 転任のご挨拶…………… 14
7. 新スタッフからの一言…………… 15

1. 創造教育推進部門の新設について

創造教育推進部門長 石井知彦



平成 30 年 9 月 5 日に新たに設置された、大学基盤教育センター創造教育推進部門の部門長を平成 30 年 10 月 1 日付けで仰せつかりました石井知彦です。

「創造教育推進部門」の役割は、大学教育基盤センター内の能力開発部、地域教育部、ICT 教育部を統括的にコーディネートし、本学の教育目標の柱として掲げている、新たな価値創造のための学士課程教育「DRI 教育」（DRI 能力を育成すること）を、学部の垣根を超えて全学的に波及・展開させることです。まず、この DRI 教育とは何かについてご説明いたします。

本学は、地域社会の課題解決に資する教育・研究等の実績をもとに、地域活性化の中核的拠点としての機能強化に取り組むことをビジョンとして掲げています。地域社会において新たな価値を創造できる人材が求められており、イノベーションを創出する「デザイン思考（D）」、レジリエンスやサイバーセキュリティに資する「リスクマネジメント（R）」、専門分野を超えた「インフォマティクス（I）」に係る教育が各大学に期待されています。香川県においても、人口減少が進行する中、地域活力を維持・向上させるイノベーションが必要とされており、上記 3 つの能力を統合した「DRI 能力」の育成が求められています。これを、本学では DRI 教育と呼んでいます。

平成 30 年度から、本学では組織改編を含む大きな教育改革を行いました。その柱であるのは上に述べた DRI 教育であり、その実現のための象徴的なものが創造工学部の新設や経済学部の組織改革、医学部における臨床心理学科の新設です。これらを契機として、DRI 教育とは何なのかを定義した上で、DRI 教育を全学に確かなものとして波及させなければなりません。実はこのことは、本学の全学改革構想を文部科学省と折衝した際に約束した事でもあります。そこで今回、DRI 教育を全学展開するために、大学教育基盤センター内に創造教育推進部門を新たに立ち上げるとともに、DRI 教育の育成を基軸として、具体的には以下の三点の取り組みを通して、学士課程教育の充実を図ります。

- (1) DRI 能力を育成するための基盤的教育
- (2) より高度な要望に応えるためのネクストプログラム（特別教育プログラム）
- (3) DRI 能力を育成するための FD プログラム

まず（1）については、全学共通科目において新たに DRI 能力育成科目を開設します。

また、従来の主題科目 B「課題発見・課題解決型授業」を更に実質化することにより、全学的な DRI 能力の育成に努めます。(2)については、学習意欲の高い学生をターゲットとして「DRI イノベーター養成プログラム(仮)」を開設し、多様性理解力やチームで考える力を養います。(1)と(2)の授業を行うためには、DRI 教育を行うことができる教員を養成することに加え、全学の教職員から DRI 教育に対する理解と協力を得なければなりません。そこで(3)として、DRI 教育やアクティブ・ラーニングに関する FD を全学および各学部単位で適宜開催し、教員・職員・学生が一丸となって DRI 能力の育成に取り組む環境を整備したいと考えています。

今回、創造教育推進部門が新たに立ち上がったわけですが、実は、このような構想は、大学教育基盤センターが立ち上がった当初から持たれていました。平成 27 年 4 月に大学教育基盤センターが改組された際、藤井宏史・前教育担当理事(前大学教育基盤センター長)の「大学教育基盤センターのウィングを広げる」という号令のもと、大学教育基盤センターの機能強化を図ることを目的として、それまでの三部(共通教育部、調査研究部、外国語教育部(現・国際教育部))に加え、本学の六学部の垣根を超えて、全学的にアクティブ・ラーニングを展開させるための拠点となることを願い、新たに三部(能力開発部、地域教育部、ICT 教育部)を新設していました。今回、創造教育推進部門が三つの部を総括的にコーディネートすることによって、もともとの役割がさらに実質化されることを期待しております。

この新しい創造教育推進部門が、本学において、DRI 教育の拠点となることを目指し、今後活動をしてまいりますので、皆様、ご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

2. 第 66 回 中国・四国地区大学教育研究会報告

大学等での教養教育に関する研究を目的とした中国・四国地区大学教育研究会が平成 30 年 6 月 2 日（土）・3 日（日）の日程で、鳥取大学にて開催された。メインテーマ「教養教育の生み出す実践力」のもと、一日目の基調講演とそれに続くパネルディスカッション、二日目の分科会が設定され、それぞれの会場で議論を深めることができた。開会行事において、実行委員長から、香川大学で開催された前年の研究会について「原点に立ち返って、あらためて学士課程教育の役割を問いなおす機会が提供された」というコメントがあった。今回の研究会では、前年度の議論を踏まえて、本来あるべき教養教育の姿とそこから生み出される実践力を展望する機会としたい、とのことであった。本学のテーマ設定が研究会の一つの流れをつくるきっかけになったとしたら、うれしい限りである。以下の参加者の報告により、研究会の様子を紹介する。

■ 基調講演・パネルディスカッション

基調講演では、京都大学大学院教育学研究科長の稲垣恭子氏より「教養・ジェンダー・教養教育」というタイトルでお話いただいた。特に明治期の日本に焦点を絞り、旧制高校男子の教養とは別に発展した、女学校女子の教養について考察が展開された。このなかで、〈おきまりの日常生活とは異なる世界を心の中に持ち続ける〉という教養の意義が示されたところは、非常に興味深いものだった。

基調講演に続いて、鳥取大学の国際交流事業と読書ゼミについて事例報告が行われた。後者は、本学の「書物との出会い」とも通じる狙いがあるようで、参考となるところが少なくなかった。

最後のパネルディスカッションでは、あらかじめ収集された承合事項に依拠して、司会者がフロアにいる各大学の代表者により詳しい内容を話してもらい、という形式で進められた。各大学の取組について詳しく聞けたことは有難かったが、せっかく稲垣氏にきていただいていることから、教養概念についてより踏み込んだ議論を行った方が有益であったと思われる。上記のように稲垣氏の提示する教養概念は、興味深いものであるが、さしあたってはクロズド（＝社会や、文化を支える営みと接点がない）なものに聴こえたので、たとえばこの点について、より詳しく稲垣氏の見解をきく、という方向でも、盛り上がったのではないかと予想する。



パネルディスカッションの時間では、この研究会の初日をどうコーディネートするのがよいのか、ということについても考えさせられた。（文責：佐藤慶太）

■人文・社会科学分科会

本分科会では、教養教育における人文・社会科学の知識習得とその実践・応用をめぐって、三つの事例報告が行われた。まず、武田元有先生（鳥取大学教育センター准教授）・鈴木生郎先生（鳥取大学教育センター講師）より「人文・社会科学における授業科目の運営体制と授業内容の標準化」と題して、鳥取大学の人文・社会科学改革及び歴史学、哲学・倫理学の事例についてご報告があった。続く、林透先生（山口大学大学教育センター准教授）からは、「共通教育（教養教育）におけるフィールド学習を取り入れた人文・社会科学の新展開」と題して、山口大学における YFL（Yamaguchi Frontier Leader）プログラムについてご説明があった。そして最後に、永松利文先生（鳥取大学教育センター教授）から「教養教育としての社会科学系の検討」と題して、鳥取大学における経済学の事例についてお話いただいた。それら三つの報告を受けて、グループ討論が行われた。標準化と質保証について、多様化する教養教育について等、限られた時間ではあったが、有益な情報交換、意見交換がなされた。（文責：西本佳代）



■自然科学分科会

本分科会では、新入生の自然科学と英語のリメディアル教育に関する報告が 2 題（鳥取大学と徳島大学）、鳥取大学の地学分野の教員による全学共通教育における地学教育に関する取り組みの報告、鳥取大学からのレポートの書き方講習会に関する話題提供が 1 題の合計 4 題の報告があり、活発な意見交流が行われた。

リメディアル教育は本学では各学部の努力に委ねられている面が大きいので、2 校からの報告は参考になる部分が多いものであった。鳥取大学では、県教委との協定のもと、高校の教員の派遣や TA の参加を組織して実施している。リメディアル教育の授業に登録をしてもらうため、入学直後の案内を徹底している。単位化しない方針で実施していることもあり、必ずしも最後まで受講が続く割合は高くないものの、十分な意義を持っているように思われた。徳島大学では入学前に LMS を用いた入学前学修を行い、入学直後のプレースメントテスト（高校復習テスト）のあと、リメディアル教育を行うという充実した設計で実施されている。対象は数学・物理学・化学・生物学・英語であり、教養教育院の大学教員が主体となっている。入学前学習は、LMS を用いることにより、負担を減らすことができ、かつ受講も増えているようだ。高校復習テスト得点分布の経年変化の分析により、学力の底上げの効果が認められることが示された。

地学教育に関する報告も刺激的なものであった。本学では科目領域にあたる仕組みとして、鳥取大学には教科集団がある。報告によると、制度化された教科集団地学のまわりに、学外者（他大学や、例えば気象台などの地学関係諸機関の方など）を含めた拡大教科集団

地学の会という集団をつくり、全学共通教育の地学教育に当たっていることが報告された。授業にはこれらの学外者にも非常勤講師として参加してもらっている。この拡大した集団は、学内の公式研究会を別途定期的に持つ形で恒常的な活動を実施していた。更に、大学の教養課程における地学教育に情熱をもってあたっている様子が紹介された。科目の構成もよく考えられた魅力的な内容であると感じられた。



この情熱の背景には、中学校以降多くの生徒が地学教育に触れることなく成人し、社会人となっていくことに関する憂慮がある。取り組みを通じて、実際に地学の受講希望者が増加している。本学の各科目領域においても学びたいところである。

最後の報告は、鳥取大学附属図書館で実施されている「レポートの書き方講習会」であり、自然科学の分野だけではなく、ひろく内容を共有できるものであった。ここで紹介された講習会で使われているパンフレットでは、学生の報告分の完成度を高めるうえで必要な観点が整理して述べられており、本学でも活用できる部分がある。(文責：寺尾 徹)

■情報教育分科会

情報教育分科会は、情報リテラシ授業における情報倫理・モラル教育、情報セキュリティ教育を主軸として、鳥取大学総合メディア基盤センターの石田雅先生の司会で実施された。事前の照合事項などのデータを参照しながら議論が進められた。事例報告は鳥取大学の取り組みが2件発表された。最初に鳥取大学総合メディア基盤センターの石田雅先生から、「情報リテラシ」授業における情報倫理・モラル、情報セキュリティ教育の授業実践と環境整備」という題目で話題提供があった。冒頭では鳥取大学におけるPC必携化の紹介があり、2016年度から学生持ち込みパソコンとして扱っているなどの運用方法が説明された。さらに、そのような状況を踏まえ、フリーソフト（オフィススイートを含む）を利用した情報リテラシにおける各回の内容が説明された。2件目として、鳥取大学総合メディア基盤センターの木本雅也先生から、「必携PCに特化したセキュリティ教育の実践」という題目で話題提供があった。まず、鳥取大学の教育システム基盤（オンデマンドプリンタ、支援システムなど）の説明があった。さらに情報セキュリティに関する学生のトラブルとその対応、情報リテラシでの情報セキュリティについてのアンケート結果の紹介があった。次にそれらを踏まえての情報セキュリティ教育の実践例が説明された。その後、全体討議を行い、情報リテラシの成績評価のあり方について情報交換などした。(文責：林 敏浩)

■外国語（英語・初修合同）分科会

一件目の発表は、高知大学の今井典子准教授による「大学生の自律学習を支援する学習

支援センターについての取り組み」であった。センターは OASIS (Open-Access Center for Self-regulated Independent Study) と呼ばれ、個別やグループ学習室を備え、DVD や多読教材が利用できるだけでなく、英会話クラブ、留学に備えた IELTS 講座の開催や留学生とのパートナーシッププログラム等が紹介された。台湾の協定校とのテレビ会議を利用した授業についての説明も行われた。

二件目の発表は、広島大学の吉満たか子准教授による「トライリンガル養成特定プログラム」についての説明であった。初修言語の学習を多くの学生が 1 年でやめてしまう現状に対し、広島大学では現状の「ベーシックコース」に加え、週 4 コマ 8 単位の「インテンシヴコース」を整備し、2018 年度から日本語、英語に加えた三言語を学ぶ特定プログラムを各言語 25 名を上限としてスタートした。3・4 年次に学ぶ発展科目では留学の単位認定も行っている。

三件目の発表は、鳥取大学の崎原麗霞准教授による反転授業を利用した中国語クラスの紹介であった。クラス・学生数、台湾への夏期研修、検定対策などの取り組みが紹介された。昨年の「中国語応用」では、宿題を出した後、授業で知識確認や課題解決のグループ学習と発表を課す反転型授業であった。理解が深まった、班の全体責任でやる気が出る、等の好意的な反応が得られた。

四件目は、鳥取大学の福安勝則教授による「課題選択の効果」についての発表であった。TOEIC の成績が思うように伸びない学生対策の一環として、授業時間外の課題を学生が選択できるようにしている。75% の学生が選択課題を希望しており、特に英語で名言を学ぶ課題の人気の高い。選択の自由による「やらされている感」の「やっている感」への変化が良い効果を生んでいるとのことであった。(文責：長井克己)

■日本語・日本事情分科会

平成 30 年度の日本語・日本事情分科会は、多文化共修の試みに焦点を当て、その要素を含む科目や関連する取り組みを扱った。4 つの発表が含まれており、実践例、学習および支援の制度、国際交流に取り組む学生組織などが紹介された。

大橋眞・徳島大学教養教育院教授は、「社会人・留学生との Peer Learning による教養教育」において、留学生・学外の社会人との共修の実践例と、その背景の考え方等を紹介した。

御館久里恵・鳥取大学国際交流センター准教授は、「国際理解の入り口としての日本語パートナー制度・パートナーシップ制度」の中で、授業内の日本語学習支援の制度と、授業外も含めたマッチングの制度を紹介した。

大島いずみ・鳥取大学非常勤講師は、「混合クラスでのケース学習による日本語授業の試み」において、ケース学習の方法論に基づく、留学



生と日本人学生の共修事例を紹介し、混合クラスならではの側面を分析した。

最後の発表である「G-frenz（グローバルフrenz）組織化の経緯と活動の実際」では、池田玲子・鳥取大学国際交流センター教授が、多文化共生のための学生組織の成立経緯、およびその活動を紹介した。いずれも意欲のないし先進的な試みであり、実施・運営面も含め大いに参考になった。（文責：高水 徹）

■保健体育分科会

保健体育分科会では、教養教育における体育・健康スポーツ科目の位置づけについて、鳥取大学西村正広助教（医学系科目）、瀬戸邦弘准教授（人文・社会系科目）、木野彩子准教授（ダンス・表現系科目）のご発表をもとに議論が進められた。

「体育・健康スポーツ科目」の存在は自明のこのように考えられている。しかし、昨今一部私立大学で実施されている英語科目の民間英会話教室への委託などに鑑みるならば、単なる「技能の習得」を目的とした実践では、「体育・健康スポーツ科目」としての今後の見通しは明るくない。他方、「役に立つ・立たない」といった価値観に基づく峻別が進む現代において、「体育・健康スポーツ科目」の価値を教養教育に求めたとしても、例えば歴史学や心理学などとの間で絶対的な位置を築くのは簡単ではないなどの議論が交わされた。

現在本学では、「健康スポーツ科目」はコミュニケーション科目として初年次教育の一端を担っている。AIの隆盛により、今後、対面による実態のあるコミュニケーションの必要性がより高まると予想される。「健康スポーツ科目」の「コミュニケーションの場」としての優位性は、多くの学生を対象として、健康的にそして安価に実施されるなど、他領域の追随を許すものではないであろう。今後は、民間業者への委託ではなく、専任教員が「体育・健康スポーツ科目」を実施することの重要性について、我々自らアピールしていく必要があると考えられた。（文責：上野耕平）

3. SPOD フォーラム 2018 報告

平成 30 年 8 月 29 日から 31 日までの三日間、幸町キャンパスにおいて四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（通称:SPOD）フォーラムが開催されました。SPOD 事業は今年で十周年を迎えましたが、この記念すべき年に、フォーラムを香川では初めて開催することができました。参加者は 458 名（うち、SPOD 加盟校から 273 名（香川大学が 73 名）、加盟校外から 185 名）で、プログラムの受講者は延べ 1585 人にも上りました。全体テーマが「教職員のミニマムエッセンシャルズを考える」というものでしたが、何を最低限身につければよいのかについて、参加者それぞれの立場ごとに深く考える良い機会になったと考えています。

トップリーダーセミナーは寺崎昌男先生と福島一政先生に講師をお願いし、本学の算学長を始め大勢の理事・副学長にも受講生として参加いただきました。シンポジウムは高橋センター長の司会のもと、「大学教職員に今、何が求められるのか」というテーマで、金子元久先生と山口裕之先生にシンポジストをお願いし、さらに小林直人先生に指定討論者としてパネルディスカッションに加わっていただきました。それぞれの先生方から、大学教職員に何が求められているのかについて様々なアドバイスをいただきました。

フォーラムが無事終了しましたこと、実行委員会のメンバーを始め、当日スタッフとしてお手伝いいただいた多数の職員の皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございます。（文責：石井知彦）



4. よりよい授業のためのFDワークショップ報告

日時：平成30年9月13日(木)～14日(金)

場所：休暇村讃岐五色台

第9回「よりよい授業のためのFDワークショップ」が、平成30年9月13～14日の一泊二日で、休暇村讃岐五色台において開催されました。このワークショップは毎年開催されていますが、今年度から本学における「新任教員研修プログラム」の受講が義務化されたことにより、本ワークショップの役割もますます重要となりました。

参加者は20名（香川大学12名、高松大学2名、高松短期大学2名、香川県立保健医療大学2名、徳島文理大学1名、人間環境大学1名）で、5人ずつ4グループに分かれてグループワークを行いました。この二日間のワークショップを通して、学生との唯一の契約書であるシラバスを適切に作成し、学生の能動的な学びを促し、適切な評価を行うことができるようになり、参加者からは大変好評をいただきました。

当初、新任教員研修プログラムの受講が義務化となったために、不本意受講の教員のモチベーションの低下を気にしておりましたが、実際にはそのような受講生は一人もおらず、皆熱心に受講していました。参加者全員で最終発表まで力を合わせて、シラバスと授業計画書とパワーポイント資料の作成を行っていただきました。最終発表では4名の方に15分ずつの模擬授業を行っていただきましたが、スティーブ・ジョブズと見紛うほどプレゼンテーションが上手な参加者や、スマホを用いた新しい双方向ツールを自在に使用した参加者、マナー講座の講師のように丁寧に優しく学生に語りかける参加者など、様々なタイプの授業を聞くことができ、大変勉強になりました。もちろん、FDの趣旨を考えると、授業経験

が少ない参加者もおりましたが、本FDを通して、素晴らしい講義を行うことができるようになりました。講師を務めた大教センターの教員と修学支援グループ・給与福利グループの職員は、前日の準備から最終日の撤収まで、きめ細やかにセッティングしてくださり、ありがとうございます。来年度も盛会に開催できますことを期待しています。（文責・石井知彦）

■プログラム概要 ※GW=グループワーク

1日目(研修は9:15～21:00)

- ・オリエンテーション
- ・アイスブレイキング
- ・GWⅠ「学生の考えるよい授業」
- ・講義Ⅰ「シラバスの書き方」
- ・GWⅡ「全学共通科目の開発Ⅰ」
- ・講義Ⅱ「学生参加型授業の技法」
- ・講義Ⅲ「よりよい学習評価のために」
- ・GWⅢ「全学共通科目の開発Ⅱ」
- ・グループ発表Ⅰ「中間発表」
- ・GWⅣ「全学共通科目の開発Ⅲ」
- ・懇親会

2日目(研修は8:00～12:00)

- ・GWⅤ「全学共通科目の開発Ⅳ」
- ・グループ発表Ⅱ「最終発表」
- ・閉会式



5. FD スキルアップ講座報告

- 講座名：「始めよう!アクティブラーニング型授業—協同学習・話し合いの技法編—」
- 日 時：平成 30 年 9 月 25 日 (火) 13:00～14:30
- 場 所：幸町北キャンパス 423 講義室
- 講 師：葛城浩一 (大学教育基盤センター准教授)

最近のアクティブラーニングへの注目度の高まりに応じてでしょうか、参加者 13 名と盛況でした。講座は①講師が論題を提示し、②受講者同士の話し合いを行い、③その成果を全体でシェアする、という 3 つの活動を 1 サイクルとし、それを計 4 回繰り返す、という形で進められました。毎回同じようにただ話し合うのではなく、1 サイクルごとに話し合い方について講師から指示があります。これが講座タイトルにある「話し合いの技法」の紹介になっており、受講者はこれらの技法を、体験を通じて学ぶことができます。話し合いのテーマは一貫して「アクティブラーニング」でした。技法を学びながら、「アクティブラーニング」についての標準的な知識を身につけられますので、一粒で二度おいしい講座と言えるでしょう。

講師の説明に対して、受講者からさらに踏み込んだ質問が出る場面もあり、受講者の積極的な姿勢が印象的でした。アクティブラーニング型授業についての関心は、今後もますます高まっていくと考えられます。大教センターとして、来年もこのシリーズで充実した内容を提供できるよう心掛ける必要があるように思いました。(文責：佐藤慶太)

- 講座名：「始めよう!アクティブラーニング型授業—協同学習・教え合いの技法編—」
- 日 時：平成 30 年 9 月 25 日 (火) 14:40～16:10
- 場 所：幸町北キャンパス 423 講義室
- 講 師：佐藤慶太 (大学教育基盤センター准教授)

この講座は、協同学習の技法のうち「教え合いの技法」(ジグソー学習、フィッシュボウル、テスト・テイキング・チーム、ノート・テイキング・ペア、ラーニング・セル、ロールプレイ)を取り上げ、それを参加者が自らの授業に取り入れることができるようにすることを目指すものです。この講座はそれぞれの技法についてある程度は知っている私にとっても学ぶことが多いものでした。というのも、それぞれの技法について講師が実際に実践した上でその



経験の問題点も込みで説明してくれるからです。なお、多くの FD スキルアップ講座では、講座の冒頭でアイスブレイクを行うのですが、講師である佐藤先生は毎回新しくてしかも斬新なアイスブレイクを行っています（今回は任意の 3 つの数字を用いて自己紹介するというものでした）。佐藤先生のチャームिंगさが際立つアイスブレイクも、この講座の大きな魅力のひとつだと個人的には感じています。（文責：葛城浩一）

- 講座名：「始めよう！アクティブラーニング型授業－協同学習・問題解決の技法編－」
- 日 時：平成 30 年 9 月 26 日（水）13:00～14:30
- 場 所：幸町北キャンパス 423 講義室
- 講 師：三宅岳史（教育学部准教授）

香川大学教育学部の三宅岳史准教授により、FD スキルアップ講座「始めよう！アクティブラーニング型授業～協同学習・問題解決の技法編～」が行われました。この講座はペアやグループで実際に問題解決に取り組み、その中で技法や留意点等を体験的に学ぶ形で進みました。具体的には「タップス(Thinking-Aloud Pair Problem Solving)」「センド・ア・プロブレム」「アナリティック・チーム」について体験的に学び、さらに技法の解説として「ケース・スタディー」「ストラクチャード・プロブレム・ソルビング」「グループ・インベスティゲーション」が紹介され、それぞれについて手順だけでなく留意点も提示されました。また本講座では演習問題のトピックとして、『対話する哲学教室』“愛”とは何か、を始めとして、出張報告書・就職活動・大統領選挙・橋の崩壊などの多岐に渡る興味深いトピックの問題が紹介されました。また演習を通じて技法だけでなく、交渉的思考、相手の視点に立つこと、論点整理の様々な形式等についても学ぶことができました。受講者の皆さんは様々な活動に積極的・意欲的に取り組んでいました。（文責：中住幸治）



- 講座名：「始めよう！アクティブラーニング型授業－協同学習・図解の技法編－」
- 日 時：平成 30 年 9 月 26 日（木）14:40～16:10
- 場 所：幸町北キャンパス 423 講義室
- 講 師：中住幸治（大学教育基盤センター講師）

大学教育基盤センター中住幸治講師による、FD スキルアップ講座「始めよう！アクティブラーニング－協同学習・図解の技法編－」が開催されました。この講座では、5 つの図解

の技法を体験しながら学びます。“〇〇の技法編”も、話し合いの技法編、教え合いの技法編、問題解決の技法編に続き四つ目となると、講座で扱う内容、特にアクティブラーニングの説明に重複がみられます。しかし、全ての講座を順番に受講されない先生もいらっしゃると思いますので、基礎的な説明は省略することができず、担当講師としては頭の痛いところでした。中住先生は、元高校教員という経歴を活かし、その課題をクリアされています。新学習指導要領における記述を用いながら、大学におけるアクティブラーニングについて説明されており、受講生の皆さんは大変参考になったのではないのでしょうか。(文責：西本佳代)

- 講座名：「始めよう！アクティブラーニング型授業－協同学習・文章作成の技法編－」
- 日 時：平成 30 年 9 月 27 日（木）13:00～14:30
- 場 所：幸町北キャンパス 423 講義室
- 講 師：西本佳代（大学教育基盤センター講師）

大学教育基盤センター主担当教員である西本佳代先生により、FD スキルアップ講座「始めよう！アクティブラーニング型授業～協同学習・文章作成の技法編～」が行われました。

この講座では最初に協同学習の定義に触れた後、文章作成の技法の中で特に「ラウンド・テーブル」「ダイアログ・ジャーナル」「ペーパー・セミナー」について実際にグループワークに取り組みながら学びました。また技法を体験する中で、アイスブレイクの手法、アクティブラーニングとその課題、ディープ・アクティブラーニングについても学び、それを活かした授業計画の作成にも取り組むなど、理論と実践が兼ね備えられた有意義な講座であったと思います。上記の 3 技法以外にも「ダイアディック・エッセイ」「ピア・エデュケーション」「コラボラティブ・ライティング」「チーム・アンソロジー」についても手順、目的、利点、注意点などが講師自身の実践例と合わせて紹介されました。日本地図、トランプ、付箋、など多様な小道具を活用した講座で、受講生の皆さんも楽しみながら意欲的に諸活動に取り組んでいました。(文責：中住幸治)

- 講座名：「初心者のためのクリッカー講座」
- 日 時：平成 30 年 9 月 27 日（木）14:40～16:10
- 場 所：幸町北キャンパス 423 講義室
- 講 師：西本佳代（大学教育基盤センター講師）

改めて説明するまでもないかもしれませんが、クリッカーとは、教員と学生の双方向コミュニケーションを可能にするツールのことです。数年前に比べれば認知度は飛躍的に上がっているように思いますが、使用しているのは一部の教員にとどまっているというのが

現状です。その理由のひとつとして、初心者には敷居が高いことがあると考えられます。この講座はその敷居をできるだけ低くすべく、本講座中に最低限の操作方法をマスターしてもらおうとするものです。実は操作方法のマニュアルもあるので自力でマスターする道もないわけではないのですが、今回参加して改めて感じたのは、その道を選ぶよりもこの講座に参加した方が絶対に楽だということです。というのも講師が懇切丁寧に寄り添って教えてくれますし、うまくいかない場合の解決策もすぐに提示してもらえるからです。以前、自力で新バージョンのクリッカーを使用しようとして挫折したことのある私にとっては、非常にありがたい講座でした。来年度も開講する予定なので、クリッカーに少しでも関心があればぜひご参加ください。おススメです。(文責：葛城浩一)



■今後のスキルアップ講座の予定

「日本語技法」をどう教えるか

3月5日(火) 13:00～15:10
幸町北キャンパス 423 講義室

「アカデミック・スキル」をどう教えるか

3月7日(木) 13:00～14:30
幸町北キャンパス 423 講義室

6. 転任のご挨拶

教育学部 准教授 中 住 幸 治
(前 大学教育基盤センター 講師)



本年10月1日付で大学教育基盤センターより教育学部に配置転換となりました。3年半という短い期間ではありましたが、前藤井・現高橋大学教育基盤センター長をはじめ、共通教育英語担当・能力開発部・国際教育部の先生方、さらに修学支援グループの職員の皆様には大変お世話になりました。

高等学校教諭として長く務めた後、初めて大学教員となる上で戸惑うことも多かったのですが、皆様からの多大なご助言ご指導のおかげをもちまして何と務めることができました。共通教育英語担当・国際教育部として取り組む中で大学の英語教育について授業だけでなく TOEIC・海外留学等様々なことを学ぶことができました。最初に大学教育基盤センターに所属したことで、学部を超えて全体から大学を見ることができ、大学への理解も深まったと思います。

また能力開発部では、大学での効果的な授業展開について多くの示唆・刺激を受けることができました。FD研修も受講生・記録係・講師として繰り返し関わる度に新たな発見があり、私の中で大きな財産となりました。

修学支援グループの皆様には、私が事務関連のことに不慣れなためご迷惑をおかけすることもあったと思いますが、温かくお教えいただき感謝しております。

教育学部では高校教員・大学教員としての実践・研究両方の経験を最大限に活かして参りたいと思っております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

7. 新スタッフから一言

大学教育基盤センター 講師 ウィリアムズ厚子



平成 30 年 10 月 1 日付けで大学教育基盤センターに採用されましたウィリアムズ厚子と申します。これまでは、香川県の公立高校で英語教育に携わってまいりました。その間、TESOL(Teaching English to Speakers of Other Languages)としての英語教授法や、英語学習者のモチベーション、記憶力、他教科理解との関連等を心理言語学の視点から研究をしてきました。

現在、小学校低学年における英語のカリキュラム導入から大学入試制度の改革等、社会のニーズに伴い英語教育が大きく変わろうとしています。そのような中で、高等教育に貢献できることに喜びと共に責任を感じています。また、香川大学は、「地域に根ざした学生中心の大学」、「グローバルな人材を育成する大学」として様々な活動に取り組んでいますが、そのような目標のもとに、英語教育を通して全学生と関わることができる大学教育基盤センターで勤務できることも嬉しく思っています。

今後、学生が卒業後に社会人として、また英語の専門家として身につけておくべき英語力がどのようなものか、明確な目標を持って取り組んでいきたいと思います。また、研究テーマでもある、学習者の個別性に基づいた英語学習法についてもさらに研鑽を積み、学生の実践的な英語力習得の一助となるように努めたいと思います。さらに、高大連携のみならず、小学校からの継続的で総合的な英語教育のあり方についても考察していきたいと考えています。ご指導をよろしくお願いいたします。



平成 30 年 10 月 1 日付けで大学教育基盤センターの特命講師に着任しました小坂有資と申します。大学教育基盤センターでは、主に DRI 教育を担当しています。DRI とは、デザイン思考 (D)、リスクマネジメント (R)、インフォマティクス (I) の頭文字です。香川大学では、地域活性化を担う人材を育成するために、DRI 教育を推進しています。

私と地域＝香川県との関係について、少しお伝えします。私の研究は、地域活性化にも関連しています。私は、2010 年からハンセン病療養所の「国立療養所大島青松園」や「瀬戸内国際芸術祭」に関わる研究をしています。また、同年から「こえび隊」としても活動しています。さらに、私は香川県出身です。ただし地域活性化においては、私のような香川県出身者だけではなく、多様な人びとが共に生きていくことのできる地域をつくるべきではないかと私は考えています。

着任したばかりで、皆様にはご迷惑をおかけすることもあると思いますが、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。



この 10 月 1 日付けで中国語特命講師に着任しました胡 継民と申します。ネクストプログラム発足した平成 25 年 4 月から今年の 3 月まで GE プログラム教員として 5 年間勤めました。再びご採用いただき、半年ぶりに大学に戻って来られたことを大変うれしく思います。仕事は以前と同じ、ネクストプログラム中国語コースの学習指導、進捗管理、HSK 受験指導などがメインで、全学共通教育の中国語授業も担当しております。

ネクストプログラム発足して今年で 6 年目になりますが、現在で中国語コースは、留学帰国者 12 名、留学中 2 名、留学準備中 1 名、勉強中 9 名で、着実に成果を上げています。学生の成長ぶりを見てとても遣り甲斐を感じています。

これからは一層努力し、より質の高い学習指導を提供し、もっと多くの学生がプログラムに参加できるようグローバル人材育成と全学共通教育の中国語教育に力を尽くしたいと思います。またセンターの一員としてお役に立てれば幸いです。

今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。



原稿を募集しています。

☆全学共通科目を担当して感じたことや意見等があれば、是非投稿してください。

★各学部が取り組んでいる教育改革も、積極的に取りあげていくつもりです。

☆宛先は、紀要編集委員会（修学支援グループ）までお願いします。